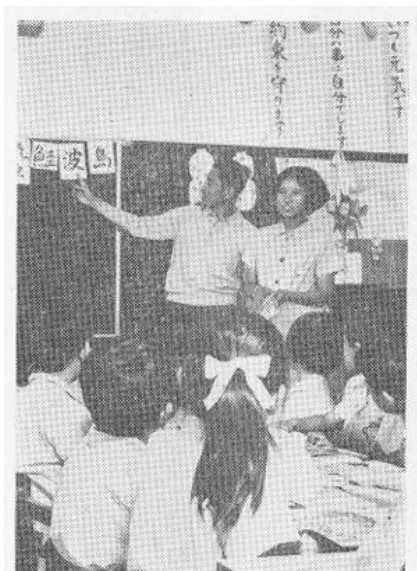


第一章 幼児の学習過程



興味深げに先生から漢字のお話を聞く園児
(ひかり幼稚園にて)

第Ⅱ部 漢字をどう教えるか

〈一〉 幼児と言葉

赤ちゃんの前だから気をつけよう

「言葉を、数多く、正確に知っていることが、他のどんな特性よりも成功の原因である」ことが、アメリカで実証されたことは、第一部で述べました。この言葉の教育は、家庭で、生まれた時からすぐに始められます。

赤ちゃんは、生まれると間もなく、人の声を耳にし、それを聞くことによって聴力を育てつつ、聞いた声を大脳に一つ一つ録音しています。それが、やがて赤ちゃんの発する言葉の基礎になるのです。

人間の頭脳は、テープレコーダーのように耳から入る声を録音し、そのくり返しの多いものから、これを再生装置に移し、話す能力に換えていくもののように思われます。

鈴木先生は、「音感生まれつきのものではなくて育てるものだ。だから、赤ちゃんの時から、できるだけ最高の音楽、最高の演奏を聞かせることが大切だ」とおっしゃっています。言葉の教育についても、まったくこれと同じように考えなければなりません。

わたしの知人に、三歳のお子さんのある方がいます。最近にわかにお話が活発になってきて、盛んに両親とお話をするようになったそうですが、その中に、ぽつんぽつんといなかの言葉やアクセントが出てくるのだそうです。

現在、その知人の家には標準語以外の発音をする人はいないので不思議のようですが、実は、このお子さんは、生後二年ほど、お母さんの実家のおばあさんのそばで育ったのです。つまり、ものも言えないし、歩くこともできないころに録音しておいたいかなまりを、おしゃべりできるようになった今、再生しているわけです。そう考えるよりほかに、その理由が考えられないのです。

そうしてみると、赤ん坊だからなにをしても、なにを言ってもわからないというわたしたちの考え方は、きわめて危険と言わなければなりません。父親と母親のいさかきも、赤ちゃんは、ちゃんと録音してしまうからです。

すなわち、*「赤ちゃんの前だから安心だ」*ではなくて、*「赤ちゃんの前だから気をつけよう」*でなければなりません。そして、家族は、できるだけなごやかに暮らし、きれいな言葉・美しい声で会話をしなければならないことになります。

早口でしゃべる親の子どもはやはり早口に、乱暴な大声でしゃべる親の子供はやはり乱暴は大声になりがちです。

親を手本にして育っている

わたしは、外から家に電話を掛けた時、電話口に出て答えているのが、家内だと思つと

娘だったり、娘だと思つと家内であつたりして、つくづく、親子は似ているものだなあと感心しています。

普段、肉声で聞くと、親子の音質の違いがよくわかつて、決して間違えることはないのですが、受話器を通すと、微妙な音質の違いが消えるので、双方が全く同じものに受け取れてしまうのです。

わたしは、この電話での間違いを通じて、普段、親子の違いを聞きわけていたのは、音質よりも、話し方、抑揚の違いであると思つていたことが、誤りであつたことを知りました。このように、子供は親の示すものをすべて吸収しているのですから、子供の言葉づかいや話し方が悪いからと言つて、子供を責めるわけにはいきません。つまり、子供の言葉づかいや話し方が悪いのは、親の示した手本が悪かつたためなのです。

アメリカの幼児教育研究所で、生後一年二、三カ月の赤ちゃんを選んで、毎日十五分

らい、話を聞かせてやる赤ちゃんのグループと、そういうことをしないグループとを作り、約半年間の結果を調査したところ、毎日定期的に話を聞かせていたグループの赤ちゃんの方が知能が著しく伸びていた、ということがわかりました。

言葉というものが、いかに幼児の頭脳に良い刺激を与え、知能を発達させるか、ということが、この実験でよくわかります。

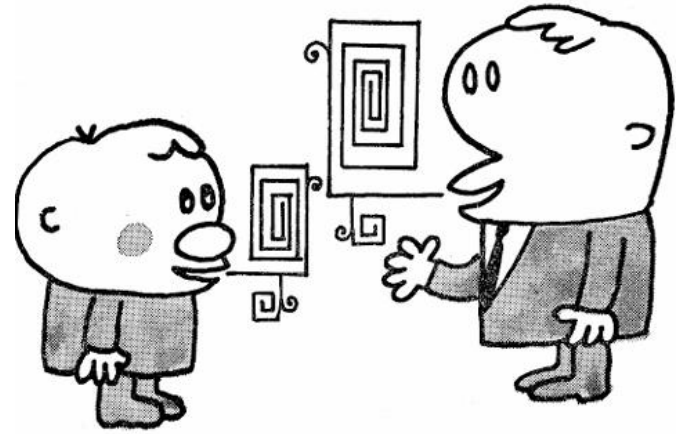
ですから、まだ言葉を聞き取る能力などないと思われるような赤ちゃんに、しきりに話しかけているお母さんをよく見かけますが、これは大切な教育になっているわけです。この場合、赤ちゃんは返事ができないだけで、後日のためにちゃんとそれを録音しているのですから、お母さんは、できるだけ心を込めて、美しく、優しく、語りかけることが大切です。

おむつを取り換える時にも、ぶつぶつ小言を言ったり、なにか怒ったように黙ってしないで「花子ちゃん、いい子ね」と呼びかけたり、「花子ちゃん、きれいきれいしましょうね」と話しかける。これが子供を育てる「言葉の教育」です。

“まなぶ”は“まねる”、“習う”は“慣れる”

“まなぶ(学ぶ)”という言葉は、昔は“まねぶ”と言いました。それは、“まね(真似)”と同じ意味の言葉です。

幼児は、見るもの聞くもの、すべてを模倣し、模倣することによって、経験を身につけ、これを能力化していきます。そして、言葉を話す能力は、二歳から三歳にかけて著しく伸びますが、この時期の幼児は、人の話す言葉を実に無造作にまねて、それを巧みに使います。“まね”がいつの間にか“ほんもの”になっています。まさに、“学ぶ”とは“まねる”ことです。



幼児は「まねる」ことと「くり返す」ことで能力を伸ばしていく

ですから、教育学者が「模倣期」と名づけているこの時期の言語環境の良し悪しは、その子の言語能力を決定します。したがって、テレビやラジオから流れる音も、幼児たちはすっかり吸収しているのですから、聞かせたほうがいいのか、聞かせないほうがいいのか、聞かせるとしたら、どんな番組にスイッチを入れるか、というむずかしい問題も当然出てきます。

学習の「学」が「まねる」なら「習（なら）う」は「慣（な）れる」ことです。「慣れる」の古い形は「慣る」で、「ならう」はその変化

したものです。

物事をくり返しくり返し、聞いたり、見たり、したりして慣れるのが、「なら（習）う」ことです。ですから、「学習」とは、まずお手本の「まね」をして、そのまねたことを反復して「慣れる」ことです。「まねる」こととそれを「くり返す」こととで、子供の能力は育つのです。

しかも、幼児は同じことの「くり返し」が大好きです。おとなにはばからしく思える「くり返し」が、子供には面白くてたまらないのです。この性質があるために、幼児は、何でも楽しんで身につけることができるのです。

物語でも、同じ物語を何回でも聞きたがります。同じ話では飽きるだろうなど考えるのは、おとなの誤った思いやりです。そんな誤った思いやりから、次々と新しい物語をしてやったのでは、言葉が身につかず、しかも集中力のない、飽きっぽい性質の子供にして

しまいます。

急速に物が豊かになった現在では、いわゆる愛情過多から、おもちゃなども次々と新しい物を与え過ぎる傾向があります。その結果、“くり返しを好む”という、発育上欠くことのできない重大な性格をこわしています。

幼児は、くり返しが好きな模倣期には、能力が伸びますが、くり返しをばからしく思うようになると、途端に伸びが衰えてきます。時期がきて、くり返しのおもしろさを感じなくなるのは自然ですが、親の誤った愛情から、どこまで伸びるか測り知れない幼児の能力を抑えてしまうことは非常に残念です。

同じことは同じではない

子供がいつまでも同じことをして楽しんでいると、「いつまでそんなことをしていれば

気が済むの」と、軽蔑するような、非難するような言葉を投げつける親があります。

こういう親の言葉からも、飽きっぽい性質が子供の中に作られていきます。親は“同じこと”と言いますが、実は外見が同じに見えるだけで、内容は決して“同じではない”のです。

同じ話を何度聞いても、いや、くり返し聞くたびに、おもしろさの度合いを増しているのです。同じ本を読む場合にも、二度目には二度目の、三度目には三度目の新しい感動と理解があるのです。

幼児が作っては壊し、作っては壊しているのは、その間に、対象物のいろいろな反応を確かめているのです。何回くり返しても同じ結果が出る。これも幼児にとって驚異であり、発見であります。そしてそこに一つの真理をつかむ。つまり、幼児はいろいろな物事の性質を究める実験をしているのです。

幼児の伸びていく生命のエネルギーが、この大変な実験にいどんでいるのです。そして、自分もかつてそのようにして現在のおとなになっているのだということを、わたしたちは忘れがちです。しかし、世の大科学者というのは、実は、この幼児の心を失わなかった人で、それを長く保ち続けて、くり返しに耐えられる人だけが、大科学者になりえたのです。

ですから、次々と変わった物語を聞かせたり、新しいおもちゃを与えたりすることに努力し、同じことのくり返しに対してまゆをしかめたり禁止したりする態度は、「しっかりと人になってくれ」と願いながら、その反対の人間に育てているのだと言えましょう。毎日、喜んで聞く同じお話を、子供がいやというまでは、親もまた心をこめてくり返してやりましょう。いやいやながらするのは、いかにくり返しが好きな子供でも、すぐに嫌うようになるでしょう。それは、将来への基礎作りをしている子供の無意識の努力を、

殺してしまうことになります。

子供はその全身全霊を傾け、目を輝かせてわたしどものお話を聞きます。わたしどもおとなにとって、これほど尊い聞き手がこの世にあるでしょうか。話し方に上手下手はないと思います。心をこめて、愛情をこめて話しさえすれば、子供は喜んで聞いてくれます。下手なら下手で、話し方の練習をさせてもらうつもりで話してやりたいものです。

なお、こうして同じ話をくり返して聞くことによって、幼児はおのずから日本語の構造というものを体得します。ですから、読んで聞かせるにも、内容、表現とも、できるだけしっかりと文章のものを選ぶことが望ましいのは、言うまでもありません。

親はつねに正確な言葉で

幼児は、サシスセソをタチツテトまたはチャチチュエチヨに、ラリルレロをダヂヅデ

ドに発音します。たとえば、「お父さん」は「おとーたん」、「ラジオ」は「ダジオ」と発音します。これは発声器官が未発達のために起こるもので、そのように発音したくてやっているわけではありません。ですから、手本になる親が、子供の発音に合わせて「おとーたんと遊ぼうね」などと言うのは全くの見当ちがいですし、子供の発声器官の発達を遅らせることになります。

総じて幼児語は使わないことです。「おくちゅ」でなく「くつ」、「でんちゃ」でなく「でんしゃ」というふうに、すべて正しい言葉で話しかけ、幼児の録音装置に、あとで訂正を必要とするような吹きこみはしないことです。

〈2〉幼児と物事^{ものごと}

空が赤いから犬が殺される

幼児は、見るもの聞くものにつけて、「これなあに」「あの人だあれ」「ここどこ」と質問を連発します。そしてこの質問の答えによって、知識を身につけていくのですから、もちろん、正しくていねいに答えてやると同時に、質問しやすいような雰囲気作りをすることが大切です。

親が気持ちよく答えてやると、幼児はそれが嬉しくてますます質問して知識を増していきます。

ところが質問をつるさがると、だんだんしなくなり、知識の増大が止まります。忙しい

時でも、明るく応答してやり、答えをもらう楽しさを、満喫させてやることです。

「なあに」「だれ」「どこ」という単純な質問から、やがて『どうして』『なぜ』というように、物事の原因や理由を追及する質問をするようになります。

それまで、単純に、別々のものと見ていた物事に対して、これを関係づけ、結びつけて考えるように成長したためです。幼児の思考能力は、こうなりますと著しく向上します。しかし、この種の質問は、以前の質問と違って、大変に答えにくいものがあり、説明すればするほど、新しい質問が出てきますので、往々にして親が受け切れなくなります。でも、決してでたらめに答えたり、はぐらかしたりすることなく、応答してやりたいものです。

わからない時には、「さあ、お母さんにもわからないわ。お父さんがお帰りになったら、一緒に聞いてみましょうね」とか、忙しい時には「またあとでね」とか、とにかく、まじ

めに対応する態度を示してほしい、と思います。

これはソ連の子供のお話です。空が夕焼けで赤かった時、狂犬が射殺される事件がありました。その時から、それを見た二歳半の男の子は、赤い夕焼け空を見るたびに、自信たっぷりに言ったそうです。「また、犬が殺されるよ」

二つの現象（空が赤い、犬が殺される）の間に因果関係を見つけようとするこの科学的な思考の芽生えを、尊重してやるのが大切なのです。

この場合、因果関係はないのですけれども、子供なりに因果関係をつけ、つけ得たことに満足しています。これをまちがいだと決めつけてはいけないのです。

頭から、正しい知識を与えることだけ考えないで、誤っていてもよいから、幼児の能力に応じた思考をさせることが大事です。それに、知識というものは、今は正しいとされていても、いつ誤りになるかわからないのです。

ですから、そんな知識を詰め込もうとして、「その考えは誤っている。本当はこうだ」と言うことくらい愚かな行為はありません。考える能力を養うことが大切なのであって、幼児の理解を超えるような単なる知識など、何の役にも立ちません。それは、どんなに詰め込んだところで、幼児の思考力の発達を妨げるだけです。

この時期には、それまで「……する」「……だ」という短文しか言えなかったものが、「……だから……する」「……なので……だ」という複文が使えるようになります。

鳥ではなく鳩は鳩、鶴は鶴

たいていの人が、鳩でも鶴でも「鳥」と教え、金魚でも鯉でも「魚」と教えます。しかし、鳩は鳩、鶴は鶴と教えるべきだと思います。「鳥」という言葉は、鳩や鶴がわかった後にそれを総合する言葉として教えるべきです。そうでないと、「鳥」や「魚」という言

葉を、正しく理解させることができないからです。

一般に幼児は、実在に即した具象的な言葉はそのまま容易に受け入れることができますが、実在でない抽象的な言葉は、具象的な実在に結び付けない限り、理解することができません。たとえば、「お母さん」という言葉は、最初は、実在である自分の母親を表わす言葉としてしか理解できません。「友子さんのお母さん」と言えば、「それはお母さんじゃない。お母さんはこれ」と言って、自分の母親を指さします。

そういう幼児ですから、抽象的な「鳥」よりも、実在である「鳩」「鶴」の方が理解しやすいのです。

漢字も、やはり、「鳩」「鶴」というような字から教えると容易に覚えます。これらの漢字は、三歳以後なら、どんな子でも必ず理解して読むようになります。学習の難易は、字画には関係ありません。

絵本で、鳩や鶴の絵のところに、これらの漢字を書き入れておけば、子供たちはすぐ覚えてしまいます。

「鳥」というような字は、その共通点に気づいて、「鳩と鶴には同じものがあるね」と言うようになった時に、①それがトリという字であること、②トリとは、鳩や鶴のように、翼があり、羽毛があり、足が二本の動物の総称であること、などを教えてやります。

数を急いで教えることはない

いま述べたように、抽象的な言葉や文字というものは、幼児の思考力を越えているために理解しにくく、なかなか関心を持ちません。したがって、親の方から一方的に教えても、それに興味が持てないので、無駄な努力に終わります。数や数字の場合もそうです。お菓子を配る時などを機会に教えると良いでしょう。もっとも、教えるというよりも、使って

見せることです。実際に使って見せていけば、だんだんと理解していきます。

「数える」ということは、いろいろな物の実態がわかって、そのうち「これは同じ仲間のもの、これは別の仲間のもの」というように、分類したり、同類を集めたりすることができて、初めてできることですから、一般に考えるほどやさしいことではありません。

世界的な数学者である岡潔先生は、「数は急いで教える必要はない。それよりも、幼児の接する実在や、それを表す言葉を、はっきり認識させることの方が先だ」と、おっしゃっています。それができなくては、数が理解できるはずがないからでしょう。

幼児の理解は、具象的なものから、具象物を通じて抽象する能力が育ち、自然と抽象的な言葉や文字の英海へと進んでいくものです。説明してやって、それでわかるというものではありません。



文字の入門はかなよりも漢字を先に

文字の入門は漢字から

「易から難へ」ということは教育の当然の手順です。ですから、やさしい漢字を先に学習し、覚えにくいかなを後にするのは、その意味で当然のことと言えます。

しかし、それ以上に大切なことは「漢字を先に学ばせる」ことの価値です。これはとても大切なことです。

かなを先に覚え、かな書きの本から読み始めた子供と、漢字を先に覚え、漢字かな混じり文から読み始めた子供とでは、読書力の育ち方が

全く違うからです。

漢字かな混じり文は、すでに述べましたように、実に読みやすく、意味がわかりやすいものですから、これからはいった子供は、読書を楽しんでいます。だから、読書力がたちまち向上して、すぐにおとなも及ばないほどになります。これに対して、かなばかりの文は、読みにくく、ゆっくり読んでも意味が取りにくいものですから、読書が少しも楽しいものになりません。楽しくない読書は、読む気がないので、読書力がつかない、というわけです。

「きのうわたくしはとうきょうえきへおじさんのみおくりにいきました」こんな簡単な文章でも、子供に読ませて、「いつ、だれが、どこへ、何しに行ったか」を尋ねてみますと、さっぱり答えられません。

だから、学校の国語学習では、読解指導と称して、「これはいつのお話ですか」「だれの

お話ですか」「どこへ行きましたか」などと一々確かめています。また、こんな質問によって、国語の力をテストしているんです。

昨日私は東京駅へ伯父さんを見送りに行きました」こういう表記になりますと、すらすらと読めて、読むなり内容がつかめてしまいます。

「き、の、う、わ、た、く、し、は……」という読み方では、終わりまで読んでも意味がわかるはずがありません。だから第一部で述べましたが、算数の文章題も解けないのだということになるのです。

日本の文章は、一つ一つの言葉が、最後の言葉と結びついていて、隣同志は関係がありません。たとえば、「昨日行きました」「私は行きました」「東京駅へ行きました」……と、いうように、次々に積み重ねられた言葉は、お互いには無関係で、最後の「行きました」に結び付いているのです。

ですから、一字一字はもちろんのこと、一語一語に止まっていたのでは、文章がわかりません。速く一息に文末まで読み通さないと、文の組立てがはっきりとわからないのです。かなばかりの文がわかりにくいのは、こういう理由があるからです。反対に、漢字かな混じり文だと一息に文末まで読み通せるので、文意がはっきりとわかるのです。

ですから、幼児には最初に漢字かな混じり文を与えて、読むことの楽しさを知らせなければなりません。

かなばかりの文は幼児にはわからない

「うちの子は本を少しも読みたがらない」と言っただけのお母さんが嘆きます。調べてみると、その子供たちが与えられているのは、たいてい、内容は豊かですが、かなばかりの本です。

どなたもご存じでしょうが、かな文字ばかり並んだ文章は、おとなにさえ、わかりにくく、めんどうなものです。まして抽象的な意味がわかりにくいかなが幼少の子供たちに喜ばれるはずがないのです。事実、わたしもがやっている漢字による教育を受けた子供たちは、すでに小学校一年生にして、かなばかりの本は読みにくくて、読む気になれない、と言っております。

ところが、いまの幼児向けの本は、すべてかな書きです。つまり、幼児に、読むということはめんどうなもの、という意識を植えつけ、読書習慣を身につけることを故意に避けていることになります。

これは、読書人を増大していかなければならないはずの出版社が、みずから減退させる大役を買っているようなものです。そして、そのことに気づいていても、最初に述べたように、編集の人は、「どんなに良い本でも、買ってもらえなければ、作るわけにいかない」

のですから、買う方にも大いに責任があることになります。つまり、日本中のお母さん方が、「かな書きの本などいらない。みんな漢字かな混じり文にしてほしい。そうでなければ買わない」というところまでいかなければならないでしょう。

ところで、漢字かな混じり文なら楽しく読める、と言っても、それは漢字が読める上で話です。漢字が読めないことには、かなばかりの本よりも、手がつけれません。つまり、お母さんの読むお話を聞いて育った幼児が、自分でそのお話を読んでみたい、という気持を起こす以前に、漢字を読む力を養っておくことがどうしても必要です。

そこで次に、漢字の与え方を考えましょう。

〈3〉漢字の与え方

絵本や文字板の利用

漢字を与える材料として、まず絵本があります。絵のところに、その絵に当たる語を漢字で書いておくという方法があります。

動物絵本や、乗り物絵本などがよいと思います。「犬・猫・馬・牛・猿・熊・象……」
「汽車・電車・自動車・自転車・三輪車・飛行機・汽船……」というような漢字が考えられます。

子供が漢字を指さして「これなあに」と尋ねてくれば、教えるのには最も理想的です。しかし、押し付けにならないように、「この猫の絵のそばにある字はね、*ねこ*と読む字なのよ」と軽く、お話をするようなつもりで、つけ加える程度で十分です。

そうすれば、子供の方から、「じゃあ、犬のそばのこの字は、*いぬ*と読むのね」というように、むしろ自分から発見していくものです。

ご存じのように、幼児が、かなを覚えるためのおもちゃとして、*文字板* というものがあります。犬の絵が表にあると、その裏に「*い*」というかな文字があるものです。

このかなの部分に、紙を貼りつけて、*犬* という漢字を書き入れるのです。

絵本にせよ、文字板にせよ、長い間に、一人で覚えるのが理想です。「早く覚えたものは早く忘れやすい」という言葉を思い出して、読めるようになるのを気長に待つことです。

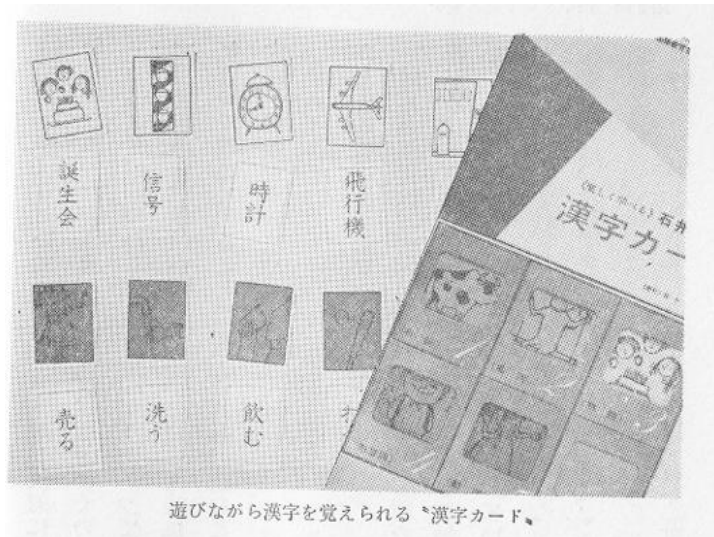
「まだ読めないの」などということは、おとなが心の中で思うことも厳禁です。わたしどもの経験では、そういう気持ちがあつては、この教育は絶対に成功しません。しかも、教えることにせっかちな親が多いものです。この教育熱心で誤りがちな親の態度が、どんなに子供の正常な成長を妨げているのか。この漢字による教育は、正しく実施された時に

は、すばらしい効果がありますが、反対に幼児の口をねじあけて、食べ物詰め込むような誤った方法をとるならば、せっかくの苦心も逆効果になってしまいます。

子供は常に背のびし、おとなになりたがっているものです。おとなのようにしたいのです。ですから、子供が新しく漢字を読んだ時には、「お母さんと同じように読めるのね」と言って褒めてやることです。それは、読むことに対する子供の興味を増し、読字力の増大に一層輪をかけます。

カードを使って漢字遊び

幼児の教育は、すべて「遊び」を通して行われるものです。漢字教育もまた、それ自身が遊びでなければ成功しません。わたしの幼い時の記憶では、かなを全部覚えたのは「いろはがるた」でした。かるた遊びをしているうちに、絵と字が結びついて、いつとはなく



字形まで覚えてしまったものです。

現在では、「漢字かるた」や「漢字カード」(大阪市田中登龍館発行)が出ていて、すでに多くの過程で利用されています。

特に「漢字カード」のほうは、ロ・目・耳などの基本漢字、先生・幼稚園などの熟語が五十語、歩く・遊ぶなどの動詞、重い・長いなどの形容詞がそれぞれ五十語、その他全部で三百枚一組のカードです。表が絵、裏が漢字のこのカードで、いろいろなゲームをして遊ぶうちに、いつか名詞・形容詞等を漢字で

覚えてしまうので、文章を読むのにすぐ役立つという効果があります。これらの教材は、いまのところ、幼稚園を通じて販売されているので一般には求めにくいのですが、ちょっと工夫すれば、手づくりできますし、お母さんの手作りは、どんなに粗末なものでも、子供にとっては、なににもまして尊く、楽しいものです。

家の中に漢字で名札貼り

幼稚園でよくやっているものに、「名札貼り」があります。机・黒板・時計・柱・壁・窓・花瓶……など、実物に一つ一つ名札を貼りつけて、実物と漢字と結びつくように計画しているわけです。

また、教室には「静かに」、廊下には「走らない」とか「右側を歩く」とか、洗面所には「手を拭く」とか、滑り台には「順序良く」とか、注意が張られています。



こういう幼稚園では、下駄箱の名札は、もちろん、漢字です。かなだとなかなか自分の場所が見つからず、混乱していたものが、漢字に改めたらすぐ見つかるらしく、混乱がなくなりました、ということでした。

家庭では、名札貼りは来客を驚かして、具合が悪いです。子供部屋があれば、これにはできます。あるお宅では、お手洗いに、毎日、漢字カードを変えて貼っている、というお話を聞きました。

「それほどまでしなくても」とお思いの方も

多いと思いますが、いいこと、役立つことは、工夫して実行してみることが、大切ではないでしょうか。それが成功へのかぎともなるのです。そして、どこまでも必要なことは、親子ともどもに楽しむ雰囲気で行わなければだめだということです。

体験を漢字にして示す

「熱い」という字など、「あつい」と読めただけでは、ほんとにこの字が読めたとは言えません。「暑い」とどう違うかがわからなければ、読めたことにはなりません。

こういう字の指導は、二本の牛乳瓶に、「熱い」「冷たい」という漢字を書いた紙を貼っておき、それぞれ、熱湯と氷水を入れておいて、子供に瓶に触れさせるのです。

子供は二つの瓶に触れることにより、熱いことの体験と、冷たいことの体験をし、その体験をそれぞれの漢字と結びつけるようになるでしょう。

こうして、「熱い」という漢字を見れば、そこに熱湯が入れてなくても、触れて熱かった時の体験が思い出され、その感触がよみがえるようになり、ここではじめて「熱い」という漢字がほんとうに読めたことになります。

長い・短い・重い・軽い・太い・細い・広い・狭い・大きい・小さい……こういう漢字も、同様にして、単に発音できるようにすることではなくて、体得させなければなりません。

マッチ箱を二つ用意して、一つには鉛などの重いものを入れて、これに「重い」と書いておき、もう一つには綿でも入れて、「軽い」と書いておく。「長い」「短い」は、使い古しの二本の割箸を利用してよいでしょう。この場合は、漢字を書いたカードを、糸で箸に結びつけておくのです。

「太い」「細い」「大きい」「小さい」……も同じことです。もうこれ以上説明すること

はないでしょう。その他、「丸い」「四角」「三角」「白」「黒」……なども、このようにして教えます。

〈4〉読みと書きの教え方

その場に応じた読み方だけを

よく尋ねられることですが、「音訓はどう指導するか」ということです。一つの漢字にいくつもの音訓がある。これを皆教えるのかどうか、ということです。

わたしの漢字教育では「一つの漢字にいくつもの音訓（つまり、読み方）がある」とは考えないのです。言葉を基にして、その言葉をあらわす文字としての漢字を考えるのです。

具体的に言いましよう。「うし」という言葉に対して「牛」という漢字を教えるのです。だから「牛」という漢字は「うし」と読めればいいので、他のことは考える必要はない、という考えです。

「ぎゅうにゅう」という言葉に対して「牛乳」という漢字を教えます。だから、この字を見れば「ぎゅうにゅう」と読めればよいのです。

丑と牛乳と、どちらを先に教えるか。それは、その実際に即して教えるのですから、「牛」が先になることもあれば、「牛乳」が先になることもあってよろしいのです。

その実物について、その実物を表わす漢字を教えるのですから、どちらから教えようと、幼児にとっては、大した問題ではないのです。牛の方が牛乳よりやさしいように思われがちですが、「牛」の実物を見ない幼児にとっては、「牛」は「牛乳」よりも決してやさしいとは言えません。たびたびいうように、幼児には、目に見えないものを想像することはで

きませんし、頭に描けないものを表わす字など、幼児は関心を持つことができないのです。漢字の使命は、それが何を意味するかを人に伝えることにあります。『牛』という字を見たら、即座に、おとなならだれでも知っている動物の牛が思い浮かべられれば、それによろしいのです。極端に言えば、『うし』でも『ぎゅう』でも、読み方はどうでもよろしいのです。

この場合、『牛の乳』と読む字だという説明をせず、そのものずばり、牛乳という実体に即して『牛乳』と教えてください。『牛』だけ見たのでは、何の反応も起こらないようによいのです。

『牛乳』の『牛』が『うし』であることを教えるのは、現実の牛（と言っても絵本でもよいのです）について、それを表す『牛』という字を覚え、しかも、幼児が「この『牛』は『牛乳』の上の字と同じではないか」という発見、もしくは疑問を発した時です。

それまでは、『牛』と『牛乳』とは、関係なく教えるのが、わたしどもの基本的な考え方です。幼児は、牛と牛乳との実際的な関係を知らないのですから、はじめからこれを関係づけて教えることは無用であり、無理でもあるのです。

やがて音訓を教える時期が来る

幼児は、牛と牛乳との実際的な関係を知らないように、最初は、文字の上でも、両者の共通点に気づかないでしょう。しかし、必ず、いつかは気づくはずで、両者の共通点に気づいた時が、実在である牛と牛乳との関係を教える時になります。その時「『牛乳』が牛の乳であるから、この言葉を表わすのに『牛』という字を使って、これを『ぎゅう』と読んでいるのだよ」と教えるのです。

つまり、幼児の発見、もしくは疑問を待って教えるべきもので、それなくして、単に音

訓の知識を授けて、幼児にその知識が得られたとしても、恐らく実効は少しもないでしょう。

それよりも、幼児に発見することの喜びを与えることです。これは学問の方法と喜びを与えることに通じるのですが、単に音訓の知識を授けることは、この発見の喜びを幼児から奪ってしまいます。

そればかりではありません。与えられた知識は失われやすいものですが、自ら発見したこと、もしくは疑問に対して教えられた知識は、心に深く刻まれて、なかなか忘れないものです。親は、何でも教えたがりますが、同じ知識でも、授けられたものと、自ら発見したものとでは、その働き、その価値の上に大変な違いがあることを知らなければいけません。

それに、教えてもらうという受け身の学習ばかりしていると、意欲に欠けた人間に育ってしまう恐れがあります。その意味からも、できる限り、子供自身に発見させ、発見する喜びを知らせることが、なにごとにも意欲をもち、能力のある人間に育てることに通ずる道なのです。

書きは読みに習熟してから

「漢字を書く指導は、いつ、どのように行うか」これもよく尋ねられる問題です。明治以来、漢字教育は『読み書き同時』、並行して学習させることになっています。

しかし私は、『読み書き分離』『読みを書きよりも先に学習させる』という考え方をとっています。

『読み』と『書き』とは、赤ちゃんの『はいはい』と『あんよ』との関係に似たところがあります。『はいはい』することによって『あんよ』の力がついていくことです。つま

り、「読み」に習熟すれば、字形の認識が自然に深まり、書きの学習に移った場合、「書き」の学習が容易になります。ですから、「書き」を急がず、まず「読み」の学習を十分にせよ」という考えです。

読み書き同時の学習は、はいはいのできない赤ちゃんがあんよさせられるようなもので、字形についての認識がまだできていないのに書かされるものですから、苦労ばかり多くて、書く力はつきません。いまの学校教育では、読み書きを並行して進め、これを同時に完成させようとしています。これはそもそも無理なこと、不可能なことを要求しているのです。しかも、こういう学習を矯正していますと、漢字嫌いになって、漢字力は身につかず、果ては勉強嫌いになってしまう恐れがあります。

書きについては、どの学校でも、書き取り練習というものをやらせています。一ペーシに同じ字を何回も繰り返し返して書かせていますが、書くのに意欲が出ませんから、なかなか書く力がつきません。それに、この書き取り練習は、その漢字が初めて出てきた所でやるだけで、あとはさっぱりやりません。これではその時は書けるようになって、しばらくすればすぐ忘れてしまうだけです。

昭和四十四年三月十日、東大名誉教授阿部吉雄博士が、わたしの唱える「読み書き分離教育」を国語審議会に提案したところ、これに対する支持と反対とをめぐって白熱的論争が行われた、と新聞が報道しました。その後四月二十二日、朝日新聞では「漢字教育、どちらが有効か」という論争を特集し、この読み書き分離論を巡って、議論が戦わされました。今まで誰からも考えられなかったこの考え方が、今、学者ばかりでなく、学校の現場においても真剣に検討されており、

表現よりも理解を

『読み』とは『理解』することであり、『書き』とは『表現』ことです。『表現』という行為は、十分に『理解』し、身についた後に、初めて、それを用いて表現しようという意欲によって起こるものです。

十分に理解できないうちに、それを用いて表現しようという意欲など起こるはずがありません。その意味でも、『書き』は『読み』の完成の上に始められるべき学習であって、同時に行い、同時に完成を求めるべきものではないことがよくわかると思います。

まして、幼児の生活には、文章を読む生活は考えられますが、『書く』生活は考えられません。『文字表現』をしなければならない理由がないのです。

わが国では、小学校の一年生から、『作文』をやらせていますが、これは背伸びした学習であって、まだ早すぎるように思われます。というのは、西欧諸国では、いずれの国で

も作文教育を、三年生、早くて二年生の中ごろ以降に始めていて、その時期においては、日本の学童の作文の方が優れているのですが、小学校の終りから中学校にかけては、逆に劣ってくる（国立国語研究所調べ）という調査があるからです。

能力を無視した時期尚早の教育は、初めのうちだけ良いように見えても、発育が早く止まり、結局はだめになってしまいます。わが国の作文教育は、明らかにその例だと思えます。内容が充実しないことから、『表現』活動をさせても成功するはずはないのです。まして、幼稚園で『作文』教育を行っているところがあると聞いていますが、はなはだ見当ちがいなことで、幼稚園では文字による『表現』よりも文字の『理解』に重点を置いて、知識を吸収し、内容を充実させる学習に努めるべきだと思います。

たしかに幼児は、わたしたちが驚くような文を書くことがあります。しかし、それは、文章よりも、言葉の表現として受け止めるべきだと思います。

わたしは、当時三つか四つだった長女と、いなか道を山の方に向って歩いていきました。その時、「おや、僕（四つ上の兄の言葉をまねてそういう習慣がついていた）が歩いて行くと、お山が逃げて行くよ。僕は強いんだなあ」と言ったのです。

そう言えば、たしかに、こちらが一步進めば向こうの山は一步後退するように見えます。しかし、わたしたちおとなは現象を常識的に頭で見て、感じるがままに見ようとしません。ですから、わたしたちは時々子供に教えられます。わたしは、この時、幼い娘に教えられた、と思いました。つまり、幼児の作文に、おとなを驚かすような表現があっても、少しも不思議はありません。しかし、それは、子供の見方が優れているのであって、作文（文章表現）が優れているわけではありません。

幼児期は、文章表現を伸ばす時期ではなくて、その基礎である「言葉による表現」を伸ばす時期です。そして、おとな以上に鋭い、真実を見る目を、さらに育てるべきだと思います。

ます。

つまり、「文章作文」ではなくて「口頭作文」を育てる時期です。そもそも文章は、言葉を文字で写したものですから、言葉による表現「口頭作文」を磨いておけば、文字力が身についた時、それをすぐに「文章表現力」に移行させることが自然にできると思います。

第2章 読書力の基礎づくり



本を棚から取り出して読む園児
(ひかり幼稚園にて)

へー 漢字力を養う

漢字は読むためにある

世の母親にとっては、幼児が「字を書く」「文を書く」ことは、実に魅力的であるにちがいない。よその子供がそういう学習をしていると聞けば、「うちの子も」と思いたくなるでしょう。

しかしここで早まったことをしますと、それこそ取り返しのつかないことになります。教育は長い一生を見通して行うべきであって、眼前の些細なことにとらわれてはなりません。

「幼児に字が書ける」それがどんなに魅力があることに見えたとしても、それによって他のどんな能力を育てることもならないのです。また、何かを生み出すことにもならない



漢字はいたるところに氾濫している

いのです。

そういうことにはとらわれなくて、吸収する力である「読書力」の基礎、すなわち漢字力、さえ養っておけば、あとは、幼児が自身の力で、自分を成長させていきます。幼児の能力に最も適しており、やさしく楽しくてきて、後に大きな力を発揮するのは、「漢字を読む」学習です。

読み書きを分離したことについては、もう一つ大きな理由があります。それは、そのことの必要度の違いです。

わたしたちは、朝起きてから夜寝るまで、新聞、雑誌、書籍はもちろん、業務上にも生活上にも文字を読まないことには、なにことも進めることができません。

ところが、書くこととなると、多くの人がほとんど一字も書かないで生活しています。そういう必要度の違う読み書きを、なぜ子供を苦しめてまで、一致させようとしているのか、わたしには不思議でなりません。極端な言い方をすれば、「漢字は読めさえすれば、書けなくてもよい」のです。少なくとも、読める字を全部かけるようにしようとする教育は、行きすぎではないかと思えます。

子供たちは、もっともっと多くの漢字が読めるように教育されるべきです。そうしなければ、吸収すべきものが十分に吸収できません。

社会では、職業によって必要とする漢字に大変な違いがありますが、その必要な漢字は、個人個人の必要によって学習すれば、それで間に合はずです。

読みを通して書く力は自然に

ただし、以上は極論であって、じっさいには、石井方式で漢字学習をしている学校では、書く力が一般のレベルより高くなっています。この学習法によれば、「書けなくてもよい」と言っても、書く力が自然と育つからです。

石井方式では、漢字が読めて、意味もよくわかり、使い方もよくわかり、その上、読む学習を重ねることにより、字形についての認識が深まり、目をつむれば、その字形が頭に思い浮かぶようになってから、その漢字を『書く』学習をしよう、というように考えています。

つまり、頭の中に刻まれてしまった漢字を、紙に移して書くのです。頭の中にある漢字を書くのですから、一点一画、手本を見ることがありません。一ぺんで正しく書けるようになります。

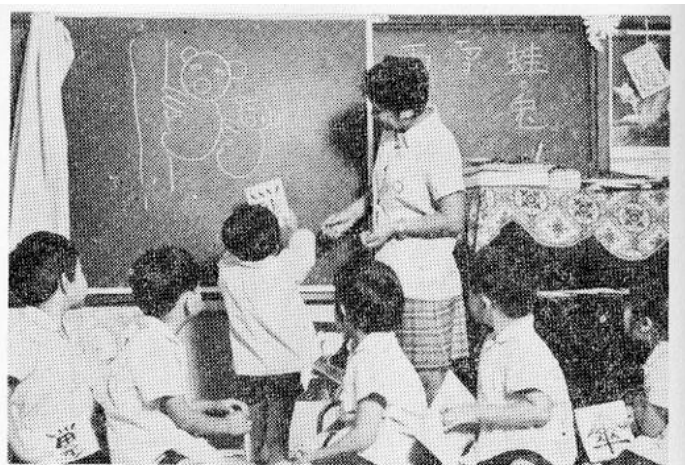
字形について全く認識のでき上らないうちに書かせられますと、一点一画にも時間がかかり、書き終わっても、正しく書けているかどうか自信が持てません。こういう練習は、いくらくり返しても、ほんとうに書く力ができ上らないのは当然でしょう。

前に「覚えるまでの学習はだれでもするが、覚えてからの学習はそれ以上に大切だ」と述べました。

子供が、学習の楽しみを知ってしまえば、「覚えてからの学習」はいりませんが、それまでは、よく覚えてしまったと思われる漢字でも、時々、子供に読む機会を作ってやり、忘れさせないようにしてやるのが大切です。

特に、絵本の絵と共に覚えた漢字など、別のところに出てきた場合には、読めないことが多いものです。

ある有名な学者のお話ですが、ある日、駅前に向こうから声を掛けられましたが、たし



黒板の絵に合う漢字カードを差し出す園児（ひかり幼稚園にて）

かに見覚えのある人だとは思いますが、さてだれであったか、思い出せなかったそうです。ところが、家に帰って、庭に出たとたんに思い出しました。それは、堀越しに、毎日あいさつを交わしている、近所の主人だったのです。

いつも、隣の堀越しに顔を合わせてあいさつしている、という決まりきった状態で会っていたために、そうでない全く異なった場所で出会ったら、どうしても思い出せなくて面くらった、という訳です。

これと同じことで、一つの漢字を、一つの決まりきった場で学習した場合には、その場では読めても、他の場では読めない、ということが子供にはよく起ります。ですから、絵本の字を別のカードに書きかえて見せる、という工夫も大切です。

読めることが読む力を生む

「よく読めるようになった漢字の学習は、もうおもしろがらないだろう」と、おとなは思いがちですが、読める漢字を読むことは、くり返しを喜ぶ幼児にとっては楽しいことなのです。

そして、よく覚えた漢字ほど、得意になって読めます。また、それだからこそ漢字をしっかり身につけることができるのです。

先にも触れた漢字かるたのゲームなども、読めるようになってからの学習のいい方法です。

絵本などで覚えた漢字を、トランプぐらいの大

きさのカードに書き、十枚くらいになったら、かるたのように並べ、お父さんが読み手で、お母さんが子供の相手になって取りっこをするのです。子供はおもしろがって、毎日のようにこのゲームをせがむものです。

わたしたちは、机に向ってするのだけが勉強で、楽しんでいるのは勉強ではない、と考えがちです。これは、勉強 という字が、「強いて勉める」つまり、「辛いけれど我慢してする」という意味の字だからですが、「強いて勉めること」が楽しくなる以前の幼少の子供にとっては、楽しんでするのが、一番効果のある学習です。

〈2〉短い文へ移る

「赤い」から「赤い赤い夕日が赤い」へ

口・目・耳・季・草・花……このような『実在に即した漢字』が読めるようになったら、大きい口、青い目、長い耳、松の木、短い草、赤い花、……など、かなも少し混じった（特に『の』『い』を使う）長い言葉にして、絵本などに書き入れるようにします。

たとえば、今まで『犬』としか書いてなかったところへ、『大きい犬』『小さい犬』とか、『親犬』『子犬』とか書き入れるのです。これが第二段階です。

第三段階で、短文にします。

「兎の耳は長い」「兎の目は赤い」

「走れ、走れ、早く走れ」

「赤い、赤い、夕日が赤い」

というように、その絵に即した短文を書き入れます。殊に、あとの二つのような繰返し語のある文は、子供を喜ばせます。

こうして、短文がひと息に読めるようになりますと、もう長い物語でも自然に読み始めます。この時、第一段階の学習にたっぷり時間をかけて、たくさんの漢字が読めるようになっていると、当然、すみやかに読書の楽しみを知ることができます。

しかし、せっかく漢字が読めるようになり、漢字かな混じり文を読む力ができても、それに合う書物が比較的少ないという悩みがあります。しかしこれも親の工夫で打開できないわけではありません。

その一つは、かな書きの本を買って、これを漢字かな混じり文に改めることです。

読む本は子供に選ばせる

もう一つは、小学校低学年向きの本を使うことです。高学年向きを選ぶ場合、親としては、ただ教育的に最も良いものと考え、それが子供に興味を持てるものであるかどうかを確かめなくて与えるようになりがちですが、どんなに内容がrippばでも、子供がこれに興味を持って読まない限り、何の効果もありません。ですから、まず子供に選ばせることです。

たとえそれが、親から見ても少々価値は低いとしても、子供が望むものを与えるならば、子供はそれを読んで、少なくとも、本を読む習慣の第一歩を踏み出すことになります。

一般に、親の陥りやすい欠点は、程度の高すぎるものを与えがちだということです。そのため、楽しいはずの読書が苦しいものになってしまうのです。

そこで順序としては、やさしすぎるくらいの方がよいのです。ただし、難しいやさし



読書の習慣は幼児から

いは、その子供だけの問題ですから、親が選ぶと、やさしいと思ったものが難しく、むずかしいと思ったものがやさしかったりすることを免れることができません。

その意味でも、たくさん本のある書店で、自由に選ばせるのがよいと思います。

子供は。一日も同じところに止まってはいません。心身ともにどんどん成長します。いつの間にか、親の知らないような知識を身につけていて、目を見はせます。

子供が選んだ本なら、それが高学年向けの本

とされていても、その子にとって、むずかしいもの、おもしろくないものとは断定できません。また、幼児向けとあるからやさしく、おもしろいというものでもありません。むしろ、幼児向け、小学何年生向けの表示にとらわれず、子供が好むからやさしく、子供が好まないからむずかしいと考えた方がよいのです。

ですから、親が選んで与えることは避けて、書店に並んでいるたくさん本のなかから、子供に自由に選ばせるのが好ましい、というわけです。

なお、読書習慣についていうならば、子供が本を読みたがらない、という場合、ごく一般的な傾向として、その両親もまた、読書の習慣がないようです。つまり、自分たちはテレビばかり見て時間をつぶしながら、「うちの子は、テレビばかり見ていて、本というものは、ほんとに読もうとしない」というわけです。

しかし、何でもおとなの真似をしたがるのが子供の通性ですから、こういう両親のそば

で育つ子供に、読書習慣が身につかなかったとしても、それはあたりまえかもしれません。

読書の習慣づけにテレビの逆用

テレビは、その意図のいかんにかかわらず、とにかく、いろいろなことを勝手に放送しています。つまり、どれを見るかは私たちに任されているのですから、ここに、選ぶという知的な営みが、つねに求められているわけです。ですから、この行為を子供に教える機会を提供しているわけでもあります。そこで親は、見るべきものを見たら、すぐにスイッチを切って、惰性で見ることをしないようにする、ということがぜひ必要です。

テレビは、スイッチを入れておきさえすれば、自然と目からはいり、耳からはいります。

その間、^{かん}何の努力もいりません。

だから、こういうものにならされてしまうと、どうしても、自分から進んで物事をやる

という気力にかけた、無気力な人間になりがちです。

たしかに、テレビを見ることによって、知識は驚くほど増すでしょう。しかし、どんなに知識が豊かになっても、やる気にかけた人間になったのでは、その知識も役に立ちません。知識は絶対に必要なものですが、その知識を使う頭の働き、やろうとする意欲は、さらに必要です。これが弱いことは人間として致命的な欠陥とさえいえます。

作家の曾野綾子さんでしたか、家にテレビがないということです。テレビを置かない理由が何であるかわたしは知りませんが、子供の教育によくないからテレビを置かない、というのでしたら、これは別の考え方もあります。テレビはあるけれども、でたらめには見ないという強い自主性、しっかりした態度を養うのには良い機会であると、わたしは思います。

これについて私の家では、「テレビを長く見ていると目を悪くする。三十分か一時間ぐ

らいで、それ以上は見ないようにしよう」と提案し、月曜日は何を、火曜日は何を、というように見る番組を決めて、それ以外は、特別の理由がない限り見ないことを、約束させました。そうと決まれば、子供たちも、思い切りよくテレビを離れます。両親がそろって読書に精出していますと、子供たちも、まねをして本を出してきて読む。

わたしの家の子供は読書好きですが、それは右のようなことが原因の一つになっているのではないか、と思っています。

また、わたしは子供たちに、小学校にはいる前から、第三部で述べるような話、特に「象形」を中心にした漢字の話をしてやり、子供たちは楽しんで、積極的に聞いてくれたものです。子供たちは、小学校に入学する頃には、五、六年生向けの本でも喜んで読むようになっていました。ですから、テレビを自主的に制限することによって、自己を制御する能力を養うとともに、一方では読書力の基礎である漢字力をつけてやるのが、読書好

きに子供を作る方法ではないか、と思っています。

〈3〉漢字の話を聞かせる

論理的な思考力が身につく

子供が、何でもかんでも覚える模倣期を過ぎたなら、第三部の「象形」に属する漢字などは、絵と関係づけて、話してやりますと、子供の理解力を一層高めるのに役立ちます。また、会意字などは、五歳くらいの幼児には、論理的な思考力を育てることをねらって、「漢字の話」をしてやることも大いに勧めたい方法です。

わたしは自分の子供にはこれを試みましたが、幼稚園の漢字学習ではまだどこも実施し

てもらっておりません。

したがって、これはどこまでも、わたしの子供にだけ行った実験にすぎませんが、その限りでは大変効果があったと思っています。つまり、機械工学を専攻しているわたしの長男は、この漢字教育が論理的な思考力を育て、数学や理科に興味を持つ原因になった、と言っています。

また、漢字の話を、論理的にしかもおもしろくしてやるためには、漢字について精通していなくてはなりませんので、親が子供に話して聞かせる場合も、子供よりまず親自身が勉強しなければなりません。

漢字の話をするには

例えば「休」という字などは、図(次のページ)のように紙に書いてみせ、「ほら、人



が木の陰にいるだろう。休む時は、このように木のそばへ行くから、

休む」という字は、木のそばへ人を書くんだよ」と言ってやります。

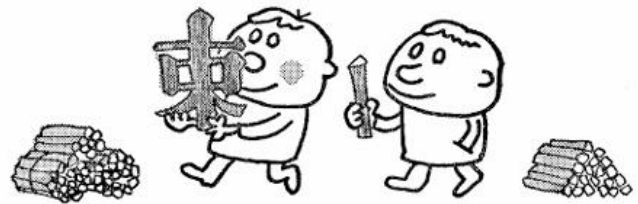
「雪」の場合は「雨は手の上にのせることができないね。でも雪だど手にのせることができるね。雪は雨の仲間だけど、手の上に乗せることができる。だから、雪という字は、手の上に雨という字を書くんだよ」

また、「左」や「右」は、「ナは、元は手の形だったんだよ。ね、こうすればちゃんと手になるね。さあ、ご飯を食べるまねをしてごらん。そう、それで、どちらの手が口へ行くかな。そう、そちらの手が口に行くね。その手を「右」と言って、こう書くんだよ。口へ行く手だから「口へ行く手」と書くのさ」

「エは、昔の定規なんだ。丁、こんな形の定規もあるね。さあ、今

度は定規を持って、線を引くまねをしよう。うまいまい。さあ、どちらに定規を持っているかな。そう、そっちの手だね。その手が「びだり」と言ってこう書くんだ。定規を持つから、手に定規がちゃんとついているだろう。定規に手。この字が「びだり」だよ」という具合です。

「速い」という字を教えるには、まず「束」が木をたくさん集めて、これになわをかけた形でできていることを説明します。それから「木を運ぶのに、一本一本運ぶのと、一まとめにして束にして運ぶのと、どちらが速く運べるだろう？」そう、束にして運んだ方が速いね。だから、「速い」という字は、束に、運ぶしるしの「辶」がついてできているんだ」と言って話してやります。



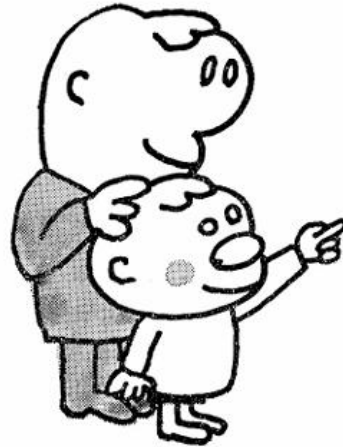
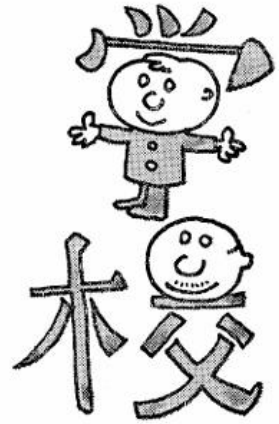
こういう漢字の話は、子供にとってなかなか興味を持てるものらしく、熱心に聞いていっぺんで覚えてくれます。

お母さん方もぜひ試して下さい。

そのためには、まずお話をしてやれるだけの漢字の知識がなくてはなりません。その参考にしたのがこの本の第三部です。ただ目を通すだけでなく、考えながら読んでいた上で、さらに、暇の時に、どのページのどの部分でも、暇に任せてお読みになると、いつか頭の中に、大きな「漢字の体系」が自然とでき上ります。

「学校」という字には先生と僕たちがいる

わたしが、小学校一年生を指導していた時に、ある生徒が「先生、学校」という字には、先生も僕たちもいるんだね」と言うのです。わたしには何を言っているのかわかりま



「学校という字には先生と僕たちがいる」——漢字の話は思考力を伸ばす

せんでした。

わたしが、「いったいどこにいるの」と聞いたところ、学という字の子の部分を見て、「この子って言うのは、僕たちのことでしょ」と言い、次に校の字の父という部分をさして、「この父っていうのは先生のことでしょ」と言うのです。これには、わたしも驚いてしまいました。校という字は、木と交との会意字です。交の字は、人が足を交差させている形を表わしたもので、これ以上分解できない字で

す。

ところが、子供には、そんな余計な知識がないものですから、これをさらに「父とに分解し、この父は先生のことだ、と考えたのです。

このように、子供の思考力には、すばらしいものがあるのです。子の思考力に訴える漢字学習は、子供の持つこのような思考力をさらに伸ばしてくれるわけです。

この「学校という字には先生も僕たちもいる」という子供の発見には驚きまして、きみの言うとおりでと言って、その時わたしは褒めたのですが、これに対してある学者が「それを認めることは、子供にうそを教えることだ」と非難したことがあります。

しかし、わたしは学者の漢字論が幼児の世界にまで下りてきては困ると思いました。

子供は学問的に漢字を学んでいるわけではありません。学者にとってどんなに価値があるうと、子供には何の価値もないのです。それよりも、子供が子供なりに考える、そのこと

に価値があるのです。

こういう思考力が伸びれば、正しい知識など、求めようとすればいつでも求められます。それに、漢字の専門家でない限り、一つ一つの漢字に対して、意味さえ正しく理解できれば、その構造や字源などの知識は、全く不要のものです。

子供独特の思考を大切に

子供の知識が、専門家には誤りであろうとも、その誤った知識が、学習を進めていくためにさらに誤りを重ねていくような性質のものでない限り、これを否定して、せっかく伸びようとする思考の芽を摘みとってしまうことは、全く愚かなことです。

むしろ、子供は子供なりに、子供らしい思考力を働かせていることを尊重してやり、子供の出した結論については、誤りを正すことよりも、思考活動そのものを褒めてやって、

ますます思考することの喜びを大きくしてやることが大切なのです。

ソ連では、科学教育を重視した結果、現実ばなれのした物語は、一切これを幼児に教えないようにした一時期があります。

科学的な真実だけを重んじ、空想的なものの架空的なものを、すべて否定したのです。また、幼児の考えの中、話の中のそういうものは、すべて科学的な立場から批判し、これを正していったのだそうです。

その結果、科学的な思考力が育っていったかという点、結果は全く逆だったのです。空想の世界は、子供たちが一度は通らなければならない成長の過程だったのです。

空想の世界に十分に生活して、初めて現実の世界の中で、科学的な思考をすることができようになるものだ、ということがわかったのです。初めから現実的な思考だけをするように導かれた子供たちは、おとなが現実的な考え方を押しつけられ押しつけるほど、逆

に非現実的な世界へと逃げて行ったのです。

結局、この教育が誤りであることを知ったソ連では、幼児には、非現実的な世界で、存分に空想にふけらせることが、結局は、科学教育の振興につながるものであるとし、今では、夢の多い物語を積極的に与えることにしているとされます。

教え方は子供が教えてくれる

わたしは、昭和二十八年以来、幼い子供たちの中にはいり、子供たちを指導してみて、初めておとなの考え方と子供の考え方との違いを知りました。

これは喜ぶだろうと思ったことが喜ばれず、こんなものだと思うことが喜ばれる、こういう指導は効果があるはずだと思っても少しも効果が上がらないのに、期待もしていなかったやり方が思わぬ効果をあげるなど、全く予想外のことの連続でした。

だから、子供を指導するに当たっては「子供に教えられるのだ」という気持が大切だと思います。子供の正しい指導は、常に子供の反応を見て、「こういう指導にはこういう反応をするのか」というように、子供に教えてもらう気持でいなければ、決してできません。

つまり、わたしが提唱している『石井方式』の原理や具体的な指導法は、すべてわたしが子供たちから教えられたものであって、わたしの頭で考えだしたことなど何一つありません。

大体、子供のことに関する限り、おとなの頭で考えだしたものは、まず当てにならないと思った方がまちがいがありません。子供が身を以て教えてくれるものを、己を空しくして受け入れる。これが私の根本的信条です。

漢字の話をする場合にもそうです。おとなの立場で教えるということになりますと、「校

は、木と交て作られた字で……」ということにしかありません。

普通のおとなでは、とても「校の中には先生がいる」というような考えは出てきません。ですから「子供に、正しい漢字の知識を与えてやるのだ」などという気負いを捨てて、むしろ「こどもと共に学び、子供に教えてもらおう」という気持ちで、話を進めていくことです。

その中で、「この字は、こういう意味の字だけど、どうしてそういう意味の字になったんだろうね」と尋ねれば、子供にしか考えられないような説明が返ってきたりしましょう。それが、人を納得させるようなりっぱなものであればもちろん結構ですが、そうでなくても子供なりに考え、説明をした、ということの方に大変な価値があると考えるべきです。そう考えると、「自分は漢字の知識がないから教えられない」などと、尻ごみする必要はないことがわかります。

いや、なまじ知識があると自認して、いわゆる漢字の知識を詰め込もうとする指導に比べたら、知識のない人に教えられた方が、子供にはずっとしあわせだ、ということができます。

〈4〉かなの教え方

漢字を助けるかな文字を通じて

小学校に上がるまでには、かなも一通りは読めるようにしてやる必要があります。今の小学校では、昔のようにはかな学習に十分な時間を取っていませんから、かなが一文字も読めないような状態で入学したら、学習が苦しいものになるし、学習になじめない危険も

あります。幼稚園での実態調査によりますと、特別に指導はしていないが、卒園時には五十音の読めない子供はほとんどいない、ということです。

つまり、子供たちは、何ということなく文字を覚える機会が多いので、特に改まった指導をしなくても読めるものようですが、もしそういう機会に恵まれなくて、入学も近くなつてなお五十音が読めないようでしたら、指導の仕方考えた方がよいと思います。

ところが、かな文字そのものは抽象的で、幼児には関心の持ちにくいものですから、文字として教えてもなかなか覚えられないものではありません。かるたなどで絵とともに覚えるとか、文字板で遊びながら覚えるとか、そういう方法によるのがよいと思います。

ただ、石井方式では、具象的な漢字から、だんだん抽象的な漢字を提出していき、抽象的な思考を育てていった上で、かなの学習にはいることにしています。

漢字の学習のさせ方のところで、第二段階には「の」「や」「い」のついた言葉を教えるこ

とを述べました。「山の木」「赤い花」というような言葉です。つまり、ここで漢字とかなの基本的な違いを理解させることにしているのです。「山・木・赤・花」という漢字は、いずれもある一定の意味を持っていて、「言葉」を表わしています。

ところが、「の」「い」というかなは、意味がなく、ただ一つの「音」だけを表わしています。ですから、漢字は意味を思い起こさせ、かなは音を思い起こさせる、という違いがあります。それを「山の木」「赤い花」という言葉を通して理解させることにしているわけです。

そして、「大きい」「小さい」というように、漢字を助ける「かな」を通して、かなの字数を増やしていきます。ある程度、かなの学習が進んだところで、次の学習にはいります。



「かきくけこ」の学習をしている園児たち(ひかり幼稚園にて)

「かきくけこ」を覚えさせるには

「おばあさんは川へ洗濯に行きました」とい

うような文章を基にして、

行かないよ。

行きました。

行くこと。

行けばよい。

行こうよ。

という変化を通じて、「かきくけこ」を学習させるのです。

わたしは、かつて指導主事をしていたころ、

国語学習で「行」はなんという字か」という質問に対して、「い」と答えているのを聞いて驚きました。「行は『い』という字だと教えておかないと『行く』と書けない」というのです。しかし、これでは国語を理解させる学習にはなりません。

何でも『正しく』書ければよい、結果に誤りがないようになりさえすればよい、というものではない。国語の性質を理解することによって、正しく書けるようにならないと書けないのです。『行』は『いく』という字であり、『いく』という意味を表わした字であるということを何よりもまず理解させなければなりません。

ただ、この「行」は、「馬」がいつでも「うま」であり、「牛」がいつでも「うし」であるのと違って、『い・か・ない』となったり、『い・き・ます』となったり、変化するので、このことに注意させる必要があります。「行」は、『い・か・いき、いく、いけ、いこ』と変わる。そこで、変わる「かきくけこ」を「行」の下につけて読みやすくするのだ、ということ

理解させなければいけません

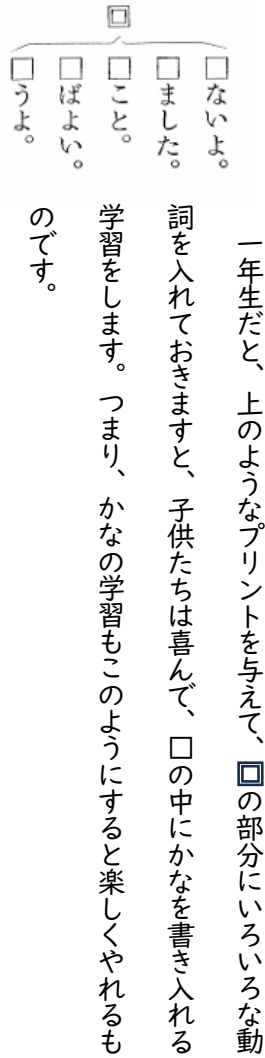
この場合、「その学習は、中学で初めてしたが、むずかしかった、幼児にそんな学習ができるのだろうか」という疑問があろうかと思います。こうした指導は、まだ幼稚園ではしたことはありませんが、小学校の一年生にはさせております。そして、一年生は喜んでこれを学習しておりますので、幼稚園で試みても、きっと成功するだろうと思います。

「行」を「い」と教えたらどうなるか

この「かきくけこ」の学習をした一年生は、動詞を見ると、「あ、これは「かきくけこだよ」「これは「さしすせそ」らしいよ」と言って、自分で試してみたりします。

今まで無意味なものであった「五十音表」がにわかに興味あるものになり、「行く」でも「歩く」でも「泣く」でも「書く」でも、同じように「かきくけこ」と変化するの

たまらなくおもしろいらしいのです。



もし「行」を「い」と習った子供たちに「行ないよ」というのを見せれば、これを「いはい」と読んでしまっています。実際また、そう読むのが当然でしょう。

しかし、石井方式で学習した子供たちは、間違いなく「いはい」と読みます。ほんとは「行かないよ」でなければならないが、「行」が「い」だから、「行ないよ」を、「いはいよ」と読むのは間違いだ、ということが理解できているのです。

こういう理解力を養うことが、国語教育というものでしょう。「行ないよ」とあれば、機械的に「いないよ」と読むような国語教育は、国語教育の名に値しないと思います。

書物にせよ、手書きの文章にせよ、五時、脱字は免れません。そういう誤字、脱字があっても、正しく直して読める力がなければ、読書力があるとはとても言えません。

ところが、今の学校教育では、そういう「考えて文字を読む」教育がなされないで、反射的、機械的に読む教育が行われているのです。

前述の動詞の変化を「がきくけこ」学習とともにする学習をしますと、日本語の特質についての観察の目も開き、思考力も増して、文字を読み、文章を読むのにも、考えて読む態度ができてきます。

〈5〉漢字の書き方

機械的に書かせる必要はない

林祿氏の『頭脳』という本の中に、「頭を良くする方法」として、栄養と睡眠のほかに、**「頭を使う」**ことだけであり、その**「頭を使う」**ことの中で最も有効なのは**「本を読む」**ことだ、とあります。

つまり、教育の面から言えば、**「本を読む」**ことが**「頭をよくする」**最良の方法だということです。

それに、第一部でも述べましたが、読みは書きに比べて、実用的価値が全く高いのです。だから、従来の**「書き」**を重視する教育は反省されなければならない、と述べたわけですが、書く指導は、そのような認識のもとに進めていくべきだと思います。

そうすれば、漢字を書く学習は、小学校に進んでからするだけでも多すぎることがわかり、幼稚園や家庭では、全くさせる必要がないことが、よくわかって頂けると思います。くどいようですが、子供は、「読む」ことによって、知識を吸収し、思考力を働かせ、頭の働きを良くすることができなのです。漢字は読めればいいのですから、幼児に漢字を書かせることなど全く無意味です。

書きたがれば自由に書かせよう

幼児は模倣が好きです。だから、親や兄弟が字を書いているのを見る機会が多い幼児だったら、どうしてもそのまねをして、書きたがると思います。

しかし、それはどこまでも模倣であって、文字表現としての「書き」をしているわけではありませんから、楽しんで書くのに任せておけばよいのです。

幼児の描く絵を見ますと、頭が体より大きい人の姿を描いています。手が頭から出ていくこともあります。それは、物を見る目ができておらず、また、手も意のごとく操る能力ができていないためです。

ですから、特別に指導し、特別に練習させなくても、目が肥え、手が発達していけば、自然と整った絵を描くようになります。字の場合も全く同じです。

今、幼児開発協会では、里崎義介、根本進の両先生が、幼児に絵画指導をしていらっしゃいます。三歳の幼児も来ていますが、その描いているのを見ますと、わたしなどには何が何だか少しもわかりません。ところが、両先生とも、子供とその絵について楽しそうに話したり、描いたおぼけのような絵でも感心していらっしゃるので、幼児たちは描くのが楽しくって仕方がないのです。

ちよっと信じられないと思いますが、幼児たちは二時間くらい、ぶっ続けに描き続けま

す。この場合、上手下手は問題ではなく、楽しんで長い時間描くことができるその能力が問題です。こうして長いこと楽しんで描けば、だれだって表現力が向上してきます。

筆順については、この項の最後に述べますが、一般の筆順に対する考え方には、改めて頂きたいことがあります。それは、筆順とは、そう書いた方がよい、という性質のものであって、そう書かなければ誤りだ、というものではない^{●●●}ことです。

だから、幼児が書きたくて書くものは、おばけのような字でも、筆順がでたらめでも、書くままにしておけばよいのです。

それでは変な筆順が身につきはしないか、と心配する人もありますが、一つの字を意識的に同じ筆順で書いているわけではありませんから、そんなものが身につくはずがありません。

どこからどう書くかと、その場限りのものですから、習慣になるはずがないのです。学

校で、正式に筆順を学習し、練習すれば、正しく書けるようになります。

筆順指導はクレヨンを持つ時期に

書家は筆順をやかましく言います。それは芸術的に美を求めるものですから、当然のことです。しかし、実用的な書は、そのような厳格さを要求すべきものではありません。目的が全く異なっているからです。

「それでは、どう書いても差支えないのか。下から書いていっても差し支えないのか」という疑問が出てくるかと思えます。筆順は正誤の問題ではありませんから、どう書いても誤りではない、というほかありません。

ただ、筆順というものは、書きよい順序なのですから、これは文字だけでなく、絵にもあるはずでです。ですから、子供が一年生になって、初めて、クレヨンを手にした時が、筆

順指導を始める適当な時期だと、わたしは思っています。

子供に線を引かせます。上から下へ、下から上へ、それを何回もくり返して引かせ、その時の書き心地をよく味わわせます。どちらが書きよいか、よく考えて「らん」と注意を与えておきます。

適当なところで、「さあ、どちらが書きよかった？」と質問します。すると、皆、「上から下へ描いた方が書きよい」と答えます。「だから、線を引く時は必ず、上から下へ書きましょう。そうすると、良い線が書けますからね」というふうに、子供たちの経験を基に、筆順の大原則を子供たちの頭にしっかりと刻みつけてもらいます。『左から右へ』の大原則も、同様にして指導します。

こうしておいて、次に、△や□を書く時に、また「どう書いたらうまく書けるか」を考えさせ発表させます。すると子供たちは、△は「」「」、□は「」「」と書くのが書き

よいことを発見します。ですから、筆順指導も、こう書けと教えるのではなく、子供たちにまず考えさせ、そして子供たちの考えた方法を発表させ、いくつもあった場合は、それに多雨いてどれが良いかを考えさせます。そうすれば、たいていの結論は、正しい筆順に落ち着きます。

こうした学習によって理解したいくつかの漢字の筆順は子供たちの身につき、あとはいちいち筆順指導しなくても、正しく書くようになります。

先生が黒板に文字を書く場合に、いつもゆっくりと、正しい筆順で書くならば、それはずっと見ている子供たちが、全くでたらめな筆順で字を書くようになるはずはありません。